



230号

2018 / 1 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



明けましておめでとうございます

**丹巴・美人谷の未来の美女たち** 丹巴・美人谷は四川省カンゼ・チベット族自治州にあり、風景の美しさ  
と美人の多さで知られている。車で移動していると村の広場で結婚式の披露宴が行われていた。正装した男  
女が輪になって歌を歌いながら踊りを披露していた。未来の美女たちも着飾って楽しげに歩いていた。  
(四川省丹巴県、2017年2月撮影)

撮影：越後雅子

‘わんりい’ 2018年1月号の目次は26ページにあります



## 大器晩成

— 中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から — 文と訳・有為楠 君代

今月のお話は、大器晩成です。

東漢(日本の歴史区分では“後漢”)の終わりごろ、崔琰さいえんと言う人がいました。彼は小さい時から武器を扱うのが好きで、勉強は嫌いでした。二十歳を過ぎてからやっと先生に師事して、『論語』などの勉強を始めました。勉強を始めてからは、一所懸命に努力をして、とうとう文武両道の立派な人になり、曹操の配下で戦いながら、政治的な提案もして、曹操の重臣となりました。

崔琰には崔林と言う弟がいました。崔林は小さい時から何をやっても不器用で、周りの人たちは、皆、彼を馬鹿にしていました。しかし、崔琰は、崔林の様子をじっくりと観察して、崔林には才能があると感じました。有能な人間になるのが、他人より少し遅いだけだと気が付き、崔林を何かと庇ってやりました。崔林は立派な人間となり、後に魏の大臣になり、安陽侯に報じられ、国内を良く治めました。後世の人々は、崔林を大器晩成の人だと言うようになりました。



説明には「大器とは、能力の高い人のこと。重責を担えるようになるには、長い鍛錬が必要なので、そういう人になるのは、比較的小さくなってからだ、という意味」

用例には「一部の俳優さんは、年をとってから才能が開き、素晴らしい俳優になります。これは、大器晩成と言えるでしょう」とあります。

この言葉は、日本でも良く使われますね。身近な人やちょっとした知り合いにも使って、慰めたりお世辞に使ったりしていますね。しかし、この言葉の由来は、もう少し重みのある話のようです。

このお話の主人公、崔琰と言う人を、もう少し詳しく見て行きましょう。

崔琰は、後漢の終わり頃の人で、上の紹介にあるように学問を始めたのは20歳を過ぎてからでしたが、しっかりと身につけ、立派な見識を持ち、人々の敬愛

を受けました。初め袁紹えんしやうに仕えましたが、人民のこと、周囲のことを考えるようにと言う諫めの言葉は、必ずしも重く受け止められませんでした。

袁紹の死後、その子供たちの権力闘争では、双方から招きを受けましたが、どちらにも加担せず、投獄されたこともあり、後に曹操そうそうに仕えることになり、

曹操が遠征した時、留守を任された曹丕そうひの補佐役となりました。この時、狩にうつつを抜かす曹丕を諫めて君子の道を説いています。また、曹操が後継者選びに悩み、臣下に意見を聴いた時、娘が曹植そうしよくに嫁いでいるにもかかわらず、曹丕を後継に推す手紙を開封したまま奏上し、曹操に、公明正大な人物との印象を与えました。

しかし後に、友人が曹操の意向を汲んだ調子のよい上奏文を書いたので、それを批判した手紙が、曹操に誤解され、投獄されたのちに死を命じられました。人々はその死を大いに惜しんだと伝えられています。このことが後に、曹操が悪玉とされる大きな原因の一つになったと、三国志の選者陳寿は認識しています。

立派な人格者である崔琰自身、勉強を始めたのは決して早くはありませんでした。しかし、学問によって磨かれた見識は非常に高く、周りの人たちから馬鹿にされていた弟、崔林の様子をじっくりと見て、この子には才能がある、ただそれが発揮されるのには時間が掛かるだろうと見て取りました。果たして、崔林は魏の文帝、明帝に仕え、魏の大臣を立派に勤めて、最後は安陽亭侯にまでなりました。

崔琰は、他にも何人もの才子を見出し、引き立てています。崔琰に見出された人は、皆人民のために政治を行う立派な政治家であったと言われています。崔琰は、権力におもねらず、正義を貫いた人で、人々の尊敬を得たからこそ、この言葉、大器晩成が、晩成の人崔林ではなく、それを見出した崔琰の故事として伝わっているのでしょう。

Cóng wú suǒ yù  
从 吾 所 欲

其の往を保たざるなり〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



貧富について論及した個所が『論語』には幾つか見られます。例えば次のようなものです。「富而可求也，虽執鞭之士，吾亦为之 (Fù ér kě qiú yě, suī zhí biān zhī shì, wú yì wéi zhī)」（富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ亦た之を為さん）〈述而第七〉。富というものが、もし求めて得られるものなら、執鞭の士というものになってもかまわない。執鞭の士とは耳慣れない言葉ですが、これには諸説があります。市場の警備員、貴人の御者、主君の露払い等々。何れも鞭を扱う職業です。身分は低く、人からは嫌われる。必ずしも誰もがなりたがるものではありません。しかしそれが出世の糸口になるものなら、そこから始めるのも悪くはない、ということでしょうか。

わが日本には、主君の草履取りから始めて、太閤にまでなった人物もいます。当時の日本と同様、混乱期にあった孔子の時代にも、そのようにして出世した人も少なくなかったのかもしれませんが。しかし誰もがそうなるとは言えません。これには運と才、そして何よりも富への執着心が必要です。

孔子に運と才と執着心が欠けていたかという点、必ずしもそうとは言えません。B.C.552年、魯の国で生まれた孔子は3歳で父を失い、今でいう母子家庭で育ちました。しかも両親は正式に結婚した仲ではないといわれています。母親は巫女でしたが、その母も17歳で亡くしています。孤児となった孔子は倉庫番や牧場の管理人をしながら、独学で学問に励み、53歳の時には大司寇(刑務長官)にまで上り詰めます。刑務を司る最高位の職です。この頃すでに、その理想に共鳴し、その人望を

慕う様々の階層の弟子たちが孔子の門を叩いています。運氣と才覚、それに執着心が加わらなければ、なかなかこうはいきません。

彼はさらに続けます。「如不可求，从吾所好 (Rú bù kě qiú, cóng wú suǒ hào)」（如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん）。しかしその富を求めても得られないというのであれば、私は自分の好みに合うことをやりたい、と。運氣と才覚に恵まれた孔子が、努力の末に得たものは政府高官の地位でした。しかし孔子の執着心はというと、別のところにありました。一言で言えば、それは自分の好む所を追求したい、ということです。自分の好む所とは何か。それは学問の道です。武力や威圧ではなく、文化と外交の力で社会秩序の回復を図ること。孔子が学問を志す目的はそこにありました。

一方、現実の政治は孔子の掲げる理想からあまりにもかけ離れたものでした。王権は無視され、民は疲弊し、まさに弱肉強食の時代が始まりました。失われた秩序を取り戻すにはもはや武力に頼るしかない、多くの人たちがそう思い始めた時代です。孔子は破壊された秩序の回復のため、あらゆる手段を尽くしましたが、貴族豪族たちによって全く阻まれ、主君からも無視されます。そこでついに、せつかく得た官職をなげ棄て、弟子たちを引き連れ、理想に共鳴する君主を探す求職の旅に出ました。しかし彼を受け入れる君主は現れず、逆に生命の危険にすら何度かさらされました。それでもなお、理想を語ることをやめませんでした。何ゆえに?…… それこそが「吾が好む所」であったから、ということです。

(‘わんりい’「中国語で読む漢詩の会」講師)

## ▶「各国のアナーキストと文通したし」

誤解を恐れずに言えば、残念ながらアナキズムは今日、すたれてるように見えます。1960年代の半ばごろ、私も少しばかり日本アナキスト連盟が主催する会合に出入りしたことがありました。しかしその連盟もとっくに解散しました。しかし、アナキズムの思想は決して滅びることはない、と私は考えています。現に6年ほど前、「日本で最も自由だった男」というサブタイトルで、大杉栄を丸ごと1冊特集した本があり、今なお少数の人々の間で大杉は、光り輝いている存在です。

とは言え戦前は、マルキシズムとともに反体制思想として人々の間に浸透していたアナキズムはとりわけ危険思想として、その信奉者には官憲の厳しい目が張り付いていました。山鹿は大杉から、「当分はおとなしく隠れて本を読め」という忠告もあり、京都の家に戻り、集めたアナキズム文献を連日熟読していました。

一方、以前から考えていた外国のエスペラント雑誌に「各国のアナーキストと文通したし」という広告を出しました。この広告は、世界の一部にしか知られていなかった日本のアナキズム運動が極東の小国に存在することを世界に直接知らせる効果があり、特筆に値するものでした。山鹿が以後、海外に積極的に入る大きな契機でもありました。

この広告に対してすぐにペトロブというロシア人がペテルブルグから、「君の“イデーオ”について知らせろ」という反応がありました。

山鹿は当時のことをこう回想しています。「そのイデーオは辞書にはただ観念と訳してあるだけで、中学一年中退の私には、カンネンという日本語が何のことか、まるでわからなかった。当時は

まだ、思想という言葉が一般化していなかった。観念一心を観る、だから千里眼の一種かなどと、あれこれ悩んだ・・・」と記しています。

## ▶電気工として中国の大連へ

貧弱な知識しかない山鹿でしたが、アナキズムの本などを一心に読みふけりました。そうして真夜中にそっと家を出て、南禅寺の山門や同志社の講堂などに、幸徳秋水が『自由思想』に書いた創刊の辞を白墨で書きなぐって歩いたのです。

筆跡を写真に撮った警察は山鹿の身辺を監視し始めました。海外からも広告の効果があり、続々と手紙が送られてきました。警察の眼が厳しくなり、家人たちも気づきだし、部屋に閉じ込められて見張りつきの監禁状態になってしまいました。

山鹿はこんな日本にいるより、無銭旅行でヨーロッパへ行こうと思い立ちました。エスペラントの文通のお蔭で各国に知己もありました。しかし生活して行くためには、印刷技術以外に新たな技術を身につけようと、当時の新技術と言われた電気技術を勉強し始めたのです。

たまたま満鉄に赴任する知人に頼みこみ、大連発電所で働く口を見つけ、中国の大連へ旅立ちました。

山鹿は満鉄大連発電所で働きながら、夜学に通って更に電気工学と中国語を勉強しました。エスペラントを学ぶこと

によって英語もいつしかわかるようになり、後には(1925年)『日・エス・支・英会話と辞書』という本を刊行するほどの実力を身につけました。

## ▶中国アナキズム運動との連携

1912年(大正元年)10月、大杉栄、荒畑寒村らは『近代思想』を創刊し、新たな一步を踏み出しました。その大杉から山鹿に、「中国の同志師復が

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」  
第二〇回 中国の大連に飛び立つ 山鹿泰治Ⅱ

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)



上海に潜入し、エス漢併用のアナキズム運動誌『民声』を週刊で出し始めている。応援に行かないか』という手紙が来ました。1914年の3月です。

山鹿は大連から少しでもヨーロッパに近づこうと思っていた矢先でした。決断と行動力抜群の山鹿はすぐこの話に乗り、技師長の机に辞表をおいて宿に戻り、トランクひとつで奉天（現瀋陽）、旅順を見物後、大連港から上海航路の船に乗り込みました。そうして上海で師復に出会うのです。

中国のアナキズム運動は1900年代に入り、当時の中国政府がパリと東京に送り出した留学生の中から起こりました。パリの中国人留学生らは『新世紀』を発行し、世界中の中国人留学生らにアナキズムの思想と運動で大きな影響を与えました。

一方東京では、大杉が日本で最初のエスペラント学校を開講しましたが、その中に中国人留学生らがいまいました。その中心人物が張継です。彼は1899年来日し、1905年には孫文の同盟会結成と同時にそれに参加し、また早稲田で学びつつ、徐々にアナキズムに傾倒するようになりました。

1914年8月、上海の師復の民声社で働いていた山鹿に大杉から手紙が来ました。

「『近代思想』をやめ、いよいよ『平民新聞』を出す。帰って来て手伝わないか』と言うのです。山鹿は師復に相談しましたところ、師復は「我々の方は何とかなる。中国と日本の同志がいよいよ連合を密にすることによって共に力は倍加する。君は帰国して活動するのが当然だ」と言いました。

その頃の師復は『民声』を一号発行するたびに寝込むほど体が弱っていました。そして1914年9月に東京に戻った山鹿は師復の死を知るのです。

### ➤ 盲目の詩人、エロシェンコの来日

山鹿は大杉の月刊『平民新聞』発行を手伝いますが官憲は厳しく、発禁処分が続くなど苦闘しましたが、山鹿は廃刊になった平民新聞を秘密に出版したりしましたが、状況が動くことはありません。「もうこんな状況では、いっそテロリズムで現状を打開する以外にない」と思うようになり、短刀や

芝居で使ったらしい六連発の銃などを手に入れましたが、大杉に見つかりました。

大杉は驚き、「幸徳事件では、思わぬことからデッチ上げられた。そのためにどんな大きな迫害が起こり、運動が立ち遅れたか、それを考えると単純な盲動は、政府を喜ばせることになる。一人二人のテロリストで革命が始まるわけではない。今はその時代ではない」と山鹿を諷めました。当初、山鹿は不服でしたが、最後は納得し、そのような計画は放棄しました。

その頃、正確には1914年、ロシアから盲目の詩人でエスペランティストのエロシェンコが来日しました。日本では盲人が按摩師として自立して生きている、と聞いて来日したのでした。その頃の日本のエスペラント運動は、「エスペラントを学ぶのはエスペラントを発展させるためにのみ運動するのだ」という派と、「エスペラントを用いて人類社会の解放を達成するためだ」という派に大きく意見が分かれていました。山鹿もエロシェンコも、もちろん後者でした。

エロシェンコは、劇作家の秋田雨雀と知り合い、その関係で望月百合子、神近市子、相馬黒光、大杉栄らと知り合うようになりました。

### ➤ 北一輝と出会う

山鹿はエロシェンコが大杉の仲間たちと話すときは、エスペラントで通訳をしましたが、官憲の監視は続いていました。エスペラント界の重鎮である黒板勝美のところ半年ばかり書生代わりに居候をしていた時、山鹿を尾行する刑事・秋葉喜作が、青山南町に北一輝がいることを教えてくれました。北は国家社会主義者としてその名は広く知れ亘っていました。山鹿は暇つぶしに北の家に出かけました。

北は1883年、新潟県の佐渡に生まれ、処女作『国体論及び純正社会主義』を刊行しました。その著作は、大日本帝国憲法における天皇制を批判した書です。北は口髭をたくわえ、中国の大人のような支那服を着て山鹿の前に現れました。（続く）

## 東西文明の比較(21)

▼世界最高の文明が隣りにあった▲

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

四方を海に囲まれた列島に人類が移住してきたのが旧石器時代、3万年以上前のことといわれています。北海道から、沖縄・九州から、そして南方諸島から、海を渡って来たようです。

かれらは交流を続け、やがてひとつの文化を形成しました。縄文文化です。長い間続いた縄文文化は、やがて大陸からの移住民と交流を深めて弥生文化を築くことになりました。卑弥呼が魏と、倭の五王が宋と、それぞれに朝貢してきました。しかし、それによって「文明」に目覚めること

はなかったのではないかと思います。

### 遣隋使・遣唐使によって「文明」を知る

私は、この遣使の役割が、日本の歴史上大変大きな出来事だったと思っています。彼らが、今日の日本の礎を築いたと信じ、感謝しています。これから、しばらく遣使の功績に触れていきたいと思っています。

では、まず「隋」とはどのような国であったのでしょうか。「黄巾の乱」から405年ぶりで中国を統一した「隋」は、581年に建国され、618年に滅びました。わずか37年間の存命でした。

しかし「隋」は、それなりに実績を上げています。

初代の文帝は、新たな律令である開皇律令を制定しました。この律令は晒首・車折などの残酷な刑罰を廃し、律を簡素化してわかり易く改めました。後の唐律令はほぼこの開皇律令を踏襲したものです。官制にも大改革を加え、最高機関として尚書省・門下省・内史省を置き、尚書省の下に文書行政機関である六部、すなわち人事担当の吏部・財政担当の度支部・儀礼担当の礼部・軍政担当の兵部・法務担当の都官部・土木担当の工部の6つを設けまし

た。その下に実務機関である九寺、またこれとは別に監察機関である御史台を置きました。地方についてもそれまでの州>郡>県という区分をやめて、州>県の2段階に再編しました。そして文帝の治績の最大のものとして称えられるのが、科挙の設立です。南北朝時代では九品官人法により、官吏の任命権が貴族勢力の手に握られていましたが、科挙は地方豪族の世襲的任官ではなく実力試験の結果によって官吏の任用を決定するという極めて開明的な手段でした。これによって官吏任命権を皇帝の元へ取り返すことを狙ったものです。

このように文帝によって整備された諸制度は、ほとんどが後の唐に受け継がれ、唐朝274年の礎となりました。これらの文帝の治世をその元号を取って「開皇の治」と呼びます。大和朝廷による「大化の改新」の原点にもなりました。文帝の功績は、淮河と長江を結ぶ大運河を開削して補給路を確立しました。

### 高句麗遠征で、隋は滅亡

しかし、この運河の建設と相次ぐ高句麗遠征が隋を滅亡に導きます。611年、第二代皇帝の煬帝は、文帝がやりかけていた高句麗遠征を以後3度にわたって行ないました。612年から本格的に開始された高句麗遠征は113万人の兵士が徴兵される大規模なものでした。しかし1回目の遠征は大敗し、さらに兵糧不足もあって撤退します。613年の2回目の遠征は、煬帝自身が軍を率いて高句麗を攻めますが結果は得られず、614年に行なわれた3度目の遠征では高句麗側も疲弊していた事もあり恭順の意を示しましたが、煬帝が条件とした高句麗王の入朝は無視され、煬帝は4回目の遠征を計画します。

こうした煬帝の施政による度重なる負担に民衆は耐えかね、遂に第2次高句麗遠征からの撤兵の途中にかつて煬帝の側近楊素の息子楊玄感が反乱を起こして洛陽を攻撃。この反乱は、煬帝が派遣した隋軍によって鎮圧され、楊玄感は敗死しましたが、これを契機にして中国全土で反乱が起きました。

そして、これまで従属していた北方の突厥は、隋の衰退を見て再び北方で反乱を起こしました。煬帝は自ら軍を率いて北方に向かいましたが突厥軍に敗れて洛陽に撤退。この敗戦が更なる引き金となり、616年には反乱が各地でピーク状態に達し、やがて反乱軍の頭領は各地で群雄割拠しました。その中には、後の唐の高祖となる李淵も隋の太原留守として独立勢力を固めていました。

この反乱に対して煬帝は最初は鎮圧に努めましたが、その処理が反徒の殺戮政策という過酷なものだったため、かえって逆効果を招き、もはや隋軍では対処しきれなくなり、煬帝は江都に留まり、反乱鎮圧の指揮しました。しかし煬帝が南方に行幸した事は実質北方を放棄して逃走したも同じであり、遂に李淵により首都大興城までもが陥落しました。李淵は表面上は煬帝を尊んで太上皇とし、煬帝の孫楊侑を即位させました。

煬帝は次第に酒と宴会に溺れて国政を省みなくなり、遂には諫言や提言する臣下に対して殺戮で臨むようになって民心を失いました。煬帝に従って江都に赴いていた隋軍の多くは北方の出身者であり、彼らはそんな煬帝を見限り遂に重臣の宇文化及を擁立して618年に謀反を起こしました。この期に及んで酒色に溺れていた煬帝ですが、直属の群臣にまで叛かれた事で遂に観念し、縊り殺されました。

## 「唐」の誕生(初唐期)

江都にいた隋軍は宇文化及の主導の下に秦王楊浩を擁立し、北へと帰還することを望みましたが、途中で竇建徳とうけんたくの軍に大敗して消滅しました。煬帝の死を聞いた李淵は、楊侑から禅譲を受けて「唐」を建国しました。建国の時点では、依然として中国の各地に隋末に挙兵した群雄が多く残っていましたが、それを李淵(高祖)の次子李世民が討ち滅ぼしました。勲功を立てた李世民は、626年にクーデターを起こすと高祖の長男で皇太子の李建成を殺害し実権を握りました。高祖はその後退位して、

李世民が第2代の皇帝(太宗)になりました。太宗は北方の強国突厥を降してモンゴル高原を羈縻(きび=中国王朝が行なった周辺異民族に対する統御政策)支配下に置き、北族から天帝の号を贈られました。また内治においては三省六部、宰相の制度を確立し、その政治は「貞観の治」として有名です。その治世について書かれたものが「貞観政要」で、日本や朝鮮で帝王学の教科書として多く読まれていました。

唐の基礎を据えた太宗の治世の後、第3代高宗の時代に隋以来の懸案であった高句麗征伐が成功し、国勢は最初の絶頂期を迎えます。しかし、高宗個人は政治への意欲が薄く、やがて武后(則天武后)とその一族の武氏による専横が始まりました。夫に代わって専権を握った武則天は高宗の死後、実子を傀儡天子として相次いで改廃した後、690年の篡奪により国号を周(武周)と改めました。中国史上最初で最後の女帝であった武則天は、酷吏を使って恐怖政治を行う一方、新興富裕階層を取り込むため土地の併呑に許可を与え版籍の調査を緩めましたが、農民の逃散や隠田の増加が進行して社会不安と税収減及び均田制の綻びを招きました。

武則天が老境に入って床にあることが多くなると権威は衰え、705年、宰相の張柬之ちやうかんしに退位を迫られました。そこで武則天が退位させた息子の中宗が再び帝位に返り咲き、周は1代15年で滅亡しました。しかし今度は、中宗の皇后韋氏が中宗を毒殺。韋后はその後即位した煬帝しょうていを傀儡とした後、篡奪を画策しましたが、中宗の甥李隆と武則天の娘太平公主の蜂起により敗れた韋后は殺され、武則天が廃位させた李隆基の父・睿宋が再び帝位につき、李隆基はこの功により皇太子の地位に就きました。その後、今度は李隆基と太平公主による争いが起きます。7世紀後半から8世紀前半にかけて後宮から発生した政乱を2人の皇后の姓を取って「武韋の禍」と呼びます。

しばらく「唐史」を続けたいと思います。



今回の漢詩の会は日中交流をテーマに、盛唐の詩人李白が安倍仲麻呂(698～770)と、晩唐の詩人韋莊(736～910)が日本の僧侶敬竜と、それぞれ別れを惜しんだ二篇の詩を学びました。

安倍仲麻呂は、日本では知らない人はいないほど有名な人物ですね。百人一首に詩を残し、中国に遣唐使として派遣されました。一方、李白は杜甫と並んで、中国二大詩人の一人とされています。その二人がなんと同時代に生きていただけでなく、唐の都でめぐり逢い、友情を育んでいたとは初めて知りました。

仲麻呂は698年生まれ、701年生まれの李白とは3歳年上です。717年、19歳で遣唐使に任命され、唐に渡ります。仲麻呂は日本にいた頃より天才少年だったようで、正式に科挙の試験を合格したかは定かではないものの、唐王朝で官僚として33年も勤め、唐で亡くなっています。

李白は、25歳で故郷の蜀を出て剡中(浙江)に至り、更に道士呉筠に連れられて長安に上り、道教を信奉していた玄宗皇帝にお目見えします。時に742年、唐はこの頃まさに全盛期でしたが、一方で玄宗は楊貴妃にのめり込み、政治が疎かになり始めた頃だそうです。

李白は玄宗皇帝から格別の恩顧を受けたものの、その奔放な振る舞いが側近の妬みを買って、わずか2年足らず、744年には長安を追放され、流浪の旅に出ます。つまり、仲麻呂と李白は742年から744年という短い間に唐で出逢い、友情を育んだ、ということになります。

李白が追放された後も仲麻呂は唐に残りますが、753年、日本に帰る決意をして、長安を後にします。ところが、船が嵐に遭い、安南(ベトナム)に流れ着いたのでした。都を追放された李白はこの頃、江南

の地を放浪していましたが、仲麻呂の乗った船が遭難したとの知らせを聞いて、この詩を詠んだのだそうです。この後、仲麻呂は長安に戻り、生涯日本に戻ることはありませんでした。また二人が再会することもありませんでした。

晁卿衡とは安倍仲麻呂の中国名、卿は尊称です。

晁卿衡を哭す 李白

日本の晁卿帝都を辞す  
 征帆一片蓬壺を繞る  
 明月帰らず 碧海に沈む  
 白雲愁色蒼梧に満つ

「哭す」とは声をあげて泣くことですが、死者を悼む感情表現であると同時に、儀式の一つでもありました。中国では昔から、葬儀の際は近親の人たちが声を張りあげて泣く習慣があります。「蓬壺」とは秦の始皇帝の時代に、伝説の島とされた蓬萊のことで、「蓬壺を巡る」とは、蓬萊の島を通して、まだ先にある日本を目指す、ということです。「蒼梧」とは、中国の南方を指します。伝説上の帝王舜が亡くなった地とも伝えられています。「碧海」と対をなしているのが、漠然と中国の大地を表わしているのと取ることもできます。蓬壺も蒼梧もどことなく神話的なイメージですね。

三句目の「名月帰らず碧海に沈む」とは晁卿衡を月にたとえ、もうあの名月は帰らないと、嘆いています。絶句にとって三句目はカギになる一句ですが、普通に考えれば

必ず巡ってくる月が帰ってこない、という大胆な表現にはドキッとさせられますね。

李白という詩人はことさら月が好きなことで有名です。池に映った月があまりに美しく、それを取ろうとして池に落ちて溺れて亡くなったという伝説もあるくらいだそうです。

kū cháo qīng héng  
**哭 晁 卿 衡**  
 作者：李白  
 rì běn cháo qīng cí dì dū,  
**日 本 晁 卿 辞 帝 都。**  
 zhēng fān yī piàn rào péng hú。  
**征 帆 一 片 绕 蓬 壺。**  
 míng yuè bù guī shēn bì hǎi,  
**明 月 不 归 沈 碧 海，**  
 bái yún chóu sè mǎn cāng wú  
**白 云 愁 色 满 苍 梧**



李白と仲麻呂がどのくらいの親友だったかは分かりませんが、中国南部の海岸で海を見ながら、この詩から、日本の友がこの海に沈んでしまった、という驚きと悲嘆にくれる気持ちが伝わってきます。

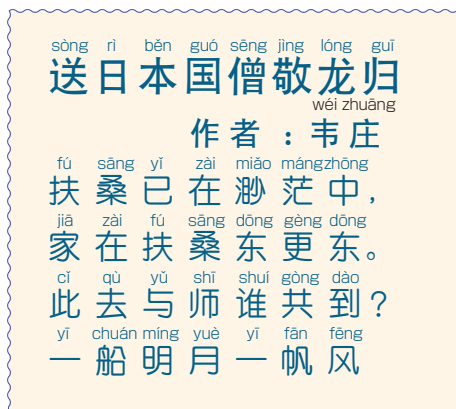
「チョット意地悪な見方をすると、大した知り合いでもなかった

のにここまで情感あふれる素晴らしい詩を作れること自体、李白はスゴイなあ、とも言えますね」と植田先生。何せ李白は「白髪三千丈」という詩句で有名です。一般人にとっては些細な出来事を大胆に大仰に表現できる天才でありました。

それにしても、はるか昔に仲麻呂が命がけで唐に渡り、当時の言葉を習得し、周りの官僚達と同等に王朝の重役を務めていたことは、本当にスゴイことだと改めて古の天才に思いを馳せてしまいます。言葉の不思議という意味では、蜀という当時の辺境出身の李白の言葉も、都言葉とは全く違っていたことは想像に難くないですが、李白と仲麻呂の交友に言葉の障害はなかったのかしら、と思わずにいられません。それにしても、中国のことわざ、「有縁千里来相会、無縁対面不相逢」(縁があれば千里も来たりて相会い、縁無ければ対面すれども相逢わず)とはよく言ったものです。縁という見えない糸に手繰り寄せられるように、日中の巨星は華やかなりし唐の都でひと時の交友を結んでいたのですね。

さて、「今日はどうしても、もう一首セットでこの詩をやっておきたいんですよ」と植田先生が次に講義して下さったのは、韋莊という詩人の残した「日本国僧敬竜の帰を送る」という詩です。日本では殆ど知られていませんが、中国では子供向けの詩集にも必ず載っている有名な詩です。中国の方がこの詩を引用するときは、日本人と仲良くしたいという気持ちの表れ、という日中友好のシンボルのような詩です。

作者の韋莊は836年生まれ。唐の滅亡後、五代十国時代に王建の建てた前蜀の幕下に加わった人物ですが、いわゆる詩人としてだけでなく〈詞〉の名人



として知られています。〈詞〉の最初のアンソロジーである『花間集』の中にも韋莊の作品が収められており、詩よりも〈詞〉のジャンルで有名な人物でした。この韋莊に送られている日本人の僧侶敬竜は、どういう人物だったのか、というのは気になりますが記録に残されていません。

ただ、この詩を通して分かるのは、唐と日本の正式な交流であった遣唐使が廃止された後も、民間の交流は途絶えることなく脈々と受け継がれて来た、ということです。最後の遣唐使が派遣されたのは831年です。以後、菅原道真により894年に遣唐使は正式に廃止となりましたが、この間、たくさん民間人が命がけで中国に渡っていたという事実の一端が窺い知れます。

扶桑とは、もともと遙か東方の蓬莱国に生えていると伝えられる木の名前で、そこから派生して日本、或いは日本の方向を指します。日本人が自国のことを扶桑ということもあります。「三菱ふそう」の「ふそう」は「扶桑」から来たのだそうです。

韋莊と敬竜がどの様に知り合い交友を結んだかは、記録に残っていないので分かりませんが、「師」と言う言葉から韋莊が日本人の僧を敬い、日本に帰国していくのを見送った、ということがあったということなんですね。

船を照らす名月の光、帆に騒ぐ風の音だけを友として海の彼方に去って行った日本の僧。暗く果てしない大海原に、白い帆と海風……潮の香りが漂い、一人舳先に立つ瘦せた僧侶の姿に月明かりがさしている。船に激しく打ち当たる波の音まで聞こえて来るような映像的な詩です。

植田先生から時代背景や人物背景を伺い、詩の情感にもたっぷり浸ったところで、中国語で朗読練習となりました。「この詩は一、二、四句目の末尾の韻を踏んだ字がそれぞれ、zhong、dong、fengで、他にsangもあり、日本人の苦手な鼻腔内で響かせる音ngを練習するのに最適な詩でもありますね。」と植田先生。そう。『わんりい』の漢詩の会の趣旨は、

書き下し文で味わえない漢詩の音の世界を味わうことでもあります。メンバー全員、中国語学習者で拼音(ピンイン)が読めます。「最近、皆さん発音はとも上達しましたね。でも、もう一步、情感を込めて詠んでみましょう。詠み方は人それぞれで構いません」と先生に言われると一同苦笑い。植田先生のお手本の朗読は本当に情に溢れ強弱長短の谷間が美しく、素晴らしいのです。

今日もあつという間の素晴らしいひと時でした。最後に植田先生が仰った言葉が印象的でした。「この詩は日中交流にとって大変重要な詩ではないかと思えます。その昔、多くの危険を冒してまでも日中

の民間人は絶えず交流を続けて来ました。交流に貢献したのは高名な方々だけではありません。まさに、この詩は『わんりい』の会そのものではないか、と思えるのです」と。その言葉を聞いた代表の田井さんの嬉しそうな笑顔が、私の胸に焼きついた、そんな美しいひと時でもありました。

今年2017年は日中国交正常化45周年、来年2018年は日中平和友好条約締結40周年の年です。『わんりい』のような民間の草の根日中友好交流が、脈々と続いてきた日中の民間交流史をつなぐ一点であることを感慨深く胸に刻むとともに、今後益々盛んになることを願わずにいられません。

「漢詩の会」たより⑱

中国近代文学の創始者・魯迅の若き思い・他一篇

(2017年12月10日)

報告：田井光枝

中国近代文学の創始者といわれ、小説「阿Q正伝」や「藤野先生」「故郷」などで日本では中学生にも知られている魯迅(1881 ~ 1936)は、生涯を通じて沢山の漢詩を書いていたのだそうです。

今回の講座では、清朝の官費留学生として日本に来て間もないころの「自題小像」と、国民党及び軍閥の支配下で失意の中にいた晩年の作「送増田涉君帰国」が取り上げられました。魯迅の詩は発表する為でなく、清朝末期ほころび始めた、漢民族にとっては謂わば異民族である満州族の支配と、その後さらに軍閥支配が続く、鬱屈する自分自身の複雑な心の内をを詩に託したものが多く、暗喩的で難解といわれています。

例えば、辮髪は満州族の風習なのですが、これに従わない者は首を刎ねられました。魯迅は日本に留学(1902年)の当初、辮髪を丸めて帽子の下に隠すという仲間たちの風潮に飽き足らず、命がけで辮髪を切り落とします。「自題小像」はその

時の気持ちを詩に託したものです。魯迅が22歳の時の詩で、魯迅の心の内が象徴的に書かれており、人によっていろいろな解釈ができるようです。

灵台→人の心/神矢→神の矢(西洋近代文明のことか)/故园→故郷、祖国/荃→香草。『楚辞』の詩句に基づく。ここでは国民を指すとも考えられる/轩辕→漢民族の祖先・黄帝のこと

詩の内容は、「誰も入ることができないはずの心の奥に新しい文明の矢がささる/我が祖国はどす黒い暗雲が垂れ込めている/自分の心を寒空の星に託そうにも誰も我が心の内を察するものはいない/自分は我が身を民族の祖先、黄帝に捧げようと心に誓った」というような感じでしょうか。

「自題小像」に比べると晩年に書かれた「送増田涉君帰国」の詩の方は、帰国する友に寄せ、かつて留学した日本の秋をしのぶ魯迅の心情を感じます。

zì tí xiǎo xiàng  
自題小像  
(1903年)

líng tái wú jì táo shén shǐ  
灵台无计逃神矢  
fēng yǔ rú pán àn gù yuán  
风雨如磐暗故园  
jì yì hán xīng quán bù chá  
寄意寒星荃不察  
wǒ yǐ wǒ xuè jiàn xuānyuán  
我以我血荐轩辕

sòng zēng tián shè jūn guī guó  
送増田涉君归国  
(1931年12月)

fú sāng zhèng shì qiū guāng hào  
扶桑正是秋光好  
fēng yè rú dān zhào nèn hán  
枫叶如丹照嫩寒  
què zhé chuí yáng sòng guī kè  
却折垂杨送归客  
xīn suí dōng zhào yì huá nián  
心随东棹忆华年

- ・扶桑⇒日本のこと
- ・华年⇒少年



# 樹木・花にまつわる物語

## 第1回 ウメ 梅

河本義宣

日本人にこよなく愛されているウメ・梅ですが、そのルーツは中国南部(中部)原産で、奈良時代以前に渡来した帰化植物です。江戸時代のウメの呼び名はムメ(mume)で、シーボルトと植物の共同研究者のツッカーリーニによって、学名は*Prunus mume Sieb. et Zucc.*と命名されました。

属名Prunusはサクラ属のことで、仲間にアンズ・モモ・サクラがあります。ウメには500種以上の品種があり、全国各地で植栽されていますが、大分県には野生化したウメがあります。

日本では万葉時代(7世紀半～8世紀半)に花と言えば「うめ」で、万葉集には116首の歌が載っています。古今集の時代に入る(以降現代まで)と花といえば「さくら」になりました。

中国原産と書きましたが、中国では紀元前(神農<sup>1)</sup>の時代?)から梅は塩と共に最古の調味料とされてきました。日本語にもなっている「塩梅(あんばい)」はこのウメと塩の味付けが上手く行ったことを示す言葉です。

書経<sup>2)</sup>に「尔惟訓于朕志。若作酒醴、尔惟麴蘖。若作和羹、尔惟塩梅。」あります。

これから四字熟語の「和羹塩梅<sup>わこうえんばい</sup>」が出来ました。

通釈:(王が傳説<sup>3)</sup>に問いかけする場面で)もし酒やあま酒を作るとするならば、汝は麴に当たることになる。もし味のよい汁を作るとするならば、汝は塩と酢に当たることになる。

語釈:「和羹」はいろいろな材料・調味料をませ合わせ、味を調和させて作った吸い物。「塩梅」は塩と調味に用いる梅酢のこと。この料理は、塩と酸味の梅酢とを程よく加えて味つけするものであることから、上手に手を加えて、国をよいものに仕上げる宰相らをいう。

また、ウメは中国の医薬書「神農本草経」の中品の中に「梅実」として収載されています。効能は「下



神奈川県湯河原幕山公園にて(2015年2月17日)

気、除熱、煩満、安心。肢体痛、偏枯、不仁、死肌。去青黒痣、悪疾。」とあります。

「神農本草経」は神農氏の後人による中国最古の本草(医薬)書。後漢から三国時代に成立したと言われましたが元本は散逸し、現存のものは500年ごろ陶弘景がまとめたものです。365種を収載、上品(120品)は無毒で長期服用が可能な養命薬、中品(120種)は毒にもなり得る養生薬、下品(125種)は毒が強く長期服用が不可能な治療薬です。

(インターネットなどから引用しました)

### ■注

- 1) 神農: 中国古代神話上の帝王。人身で牛首。農耕神と医薬神の性格をもち、百草の性質を調べるためにみずからなめたと伝えられる。日本でも、医者や商人の信仰の対象となった。(デジタル大辞泉より抜粋)
- 2) 書経: 中国の経書。五経の一。20巻、58編。孔子の編といわれる。堯・舜から周までの政論・政教を集めたもの。もと「書」「尚書」。宋代から「書経」とよばれる。秦の焚書で散逸、前漢の伏生の口伝「今文(きんぶん)尚書」と、孔子の旧宅で壁中から発見された「古文尚書」との二系統があったが、現在「古文」とされている「書経」は東晋の梅賾の偽作。(デジタル大辞泉より)
- 3) 傳説: 中国、殷の高宗の大臣。刑人とともに道を補修していたところを高宗に見いだされて宰相となり殷の中興に寄与したという。(三省堂 大辞林より)

# 海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ①)

高島 敬明

## 1. はじめに

私は、昭和42年(1967年)の4月に土木技師として物流会社のN社に入社し、一年間物流研究所で研修を重ねました。配属先は一般物流と違って超重量物の輸送、据付、プラントの建設などを行う少し特殊な「重機建設部」となり、現場での建設工事に従事することになりました。

入社当時は、北海道全域で橋梁架設の工事、札幌高速道路の橋梁工事、苫小牧新港の石油精製工場などのプラント建設工事とゼネコン顔負けの仕事に従事するなど経験を重ね、昭和51年(1976年)、31歳の時に名古屋支店に転勤になりました。名古屋支店は時代の趨勢もあり、大型の海外工事が多い店で、当然海外勤務も多かったのです。私は、海外勤務の希望があり仕事の適不適も考慮されたのかこの店に配属されたようです。そのような中、旧ソ連(ソビエト社会主義共和国連邦、1922年建国～1991年崩壊)での仕事の話が出ましたが、社内では非常に注目されたプロジェクトでした。社内では人選に入ったわけですが、ロシア語の話せる人はいません。そして共産圏でもあり、かつ地域的にも経験者はおらず、適任者がなかなか見当たりませんでした。会社はベテランの作業班長を同伴させることにして、全く白紙の私、高島を指名し、決着を見ました。海外への希望を持っていた私は、内心嬉しく思ったものです。

## 2. 海外出張

さて、この「A.ソ連、LX-プロジェクト」を皮切りに、「B.ナイジェリア国、カドナリファイナリー」、「クウェート国、KCPCリファイナリー」と私が経験した仕事、生活の中での「愉快だったこと」「馬鹿げたこと」「危険だったこと」等を壮年期の人生を捧げた一コマを生き証として「海外

出張の思い出」と題して、徒然なるままに書き綴ることにいたします。

### A. ソ連、LX-プロジェクト機器据付工事

- 場所=黒海北辺のノボロシースク市
- 期間=1977～78年(昭和52～53年)
- 工事内容=カスピ海から油送管で運ばれた原油を、黒海でタンカーに積むための岩壁設備の建設工事(岩壁の配管と船を結ぶ「く」の字形の伸縮配管ローディング・アーム<sup>注</sup>)の直径は28インチ(約71mm)で当時世界一と言われていた。

## 3. 日本出発からクラスノダールまで

桜の便りが出始めた頃、名古屋を離れ東京秋葉原の本社で最後の打ち合わせを終わらせ、約1年の予定で妻子を残し黒海沿岸の都市・ノボロシースクに向かいました。その頃、共産主義国家としてのソ連は、ゴルバチョフのペレストロイカの少し前であり経済は疲弊し、人心は荒れアルコール中毒が多くて問題になるような時代でもありました。1ドルが300円、1ルーブルが1ドルでした。赴任に当たって、営業から教えられた、100円ライター、パンスト、その年の残っていたカレンダーなど現地には無くて安いものを、プレゼント用に持って行ったのを懐かしく思い出します。

飛行機は、羽田発のアエロフロート機でモスクワまでの直行便でした。当時は行きは9～10時間、帰りは偏西風の関係で8時間かかると言われていました。夜の10時頃に離陸した飛行機は、絵に描いたような佐渡島の上空を通過し、30分後にソ連の海岸線に達し、ウラジオストックをさらに北上し、中国領の北を真西に進路をとって雪を被った山々そして真っ白い氷の上を飛び続けました。広いと思っていた日本海の狭さに驚き、何時



間飛んでも真っ白い山々や氷原の大陸にそして町らしい明かりも見られない広大な大陸にはただただ驚くばかりです。

翌朝によやくモスクワのシェレメチョボ国際空港に到着し、入国審査に臨みました。入国審査は厳しく、びっくりしました。審査官はなぜか国境警備兵だそうで

す。薄暗い部屋に通され、そこで軍服、軍帽の兵隊が日本の昔の机に置かれた電球のスタンドのようなもので、ライトを調整しながら私の顔に当て、上目遣いに見る光景は今でも脳裏から離れません。作業員は問題なく通関できましたが、引率者の私への取り調べは非常に厳しいものでした。持込現金のこと、宗教のこと、いろいろな角度から立ったり座ったりして質問を受けました。

ロシア語と英語で調べられましたが、私は教えられたように英語はしゃべれない、わからないと日本語だけで押し通しました。審査官もあきらめたのか1時間後にやっと解放してくれました。最後にゲートを通過して皆が待つ待合室に入っていると、黙り込んで心配していた全員が安堵の表情を見せ、と同時に拍手が起こりました。この瞬間皆との一体感ができたような気がして、胸が熱くなったのを思い出します。

国際空港から乗り換えて、今度は2000キロメートル南のクラスノダールまでローカルの旅になります。国内線はロシア人がほとんどで全員少し緊張しました。早速最初のトラブルが発生しました。私の座席のシートベルトが片方無いのです。もう一人もベルトが無くて身振り手振りで抗議したのですが、スチュワーデスは「ヤポニマイ!」(どうしよ



うもない)と首をすくめ手を開くばかりです。満席ですし、結局我々をほったらかしで着陸までそのまま飛行しました。ちょうど日本で自衛隊の戦闘機と旅客機とのニアミスが騒がれ

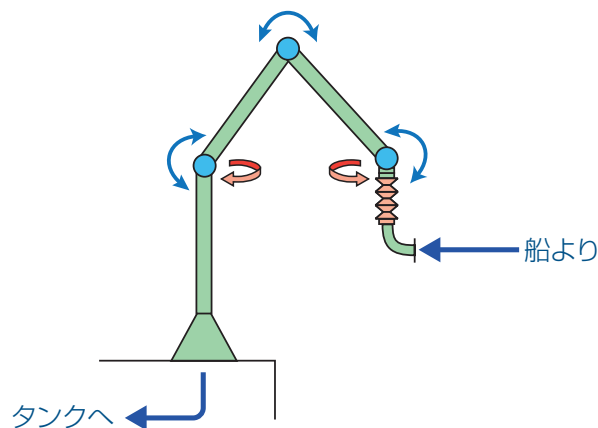
ていましたが、何となく機外を眺めていたらソ連の戦闘機が下から斜め上に向かって主翼すれすれに通過していきました。その大きさとパイロットの顔も見えたような気がしましたが、とんでもな

い国に来てしまったと思いました。後で我々の頼りない通訳(女性)の話では、よくあることだそうで旅客機を目標に訓練しているとのことでした。樺太沖の大韓航空機撃墜事件も納得した次第です。

いろいろと危険な目にも遭いましたが、素敵なおスチュワーデスと3時間を共にし、無事にクラスノダール空港に着陸しました。(続く)

#### ■注

ローディング・アーム:LNG(液化天然ガス)やLPガス(液化石油ガス)等の原料を輸入し、陸揚げする際に、陸側から船側の積み出し用取り合いフランジ(継ぎ手)へ配管を接続し、その配管を用いて陸側タンクへ受入を実施している。このときに用いる配管をローディング・アームという。(図ともWeblio辞書より抜粋)



ローディング・アーム概略図

## 4年ぶりの北京旅行は快適そのもの、しかも充実していた(後編)

為我井 輝忠

今回の北京旅行は4年振りであった。10月23日から11月5日までの2週間北京に滞在した。最初は天津にも行ってみたいと思ったが、北京で見たいところや訪ねたいところがあったので、北京のみとした。前半は気ままに一人で市内を歩き回った。それについては前編で記した通りである。後半は後から北京入りした“わんりい”の田井光枝、杉野一、高橋節子各氏と共に、長年の友人である周路氏の、30年に及ぶ芸術活動の回顧記念展のオープニングに出席し周氏との旧交を温めることが出来た。彼は20年前に日本へ来て、版画研修の為長期滞在していた折、東京都内や町田で展覧会を開いたことがあった。町田で開かれた展覧会を偶然見て彼と初めて会った。以来何度も会い、彼の帰国後、安徽省合肥に出掛けたり、陝西省の黄土高原へ彼と一緒に旅行をした。その後も彼との交友は続き、「老朋友」と言ってもよいほどである。

周路氏の回顧展は「黄色い大地」というタイトルが付けられ、長年陝西省陝北の黄土高原をフィールドとした写真と版画によるもので、両方合わせてその数およそ120点にも及ぶものである。会場は北京市朝陽区の炎黄芸術館で、会期は11月2日から6日まで開催された。

2日が開幕式であったが、周路氏はその前の晩に忙しい最中に我々を訪ねてホテルまで会いに来てくれた。10年振りの再会である。作品集2冊を持参され、プレゼントしてくれた。彼は以前に会った時と比べると、かなり恰幅もよくなり、人当たりもよくなっ

てきたようである。ただ、相変わらず日本語の能力は全く同じである(ごめんなさい!)。娘さんも一緒に来られた。彼女とは小学生の時に安徽省合肥で2度会っているが、それから10数年を経て大学を卒業し、今では父親と同じように美術の仕事をしているという話であった。

開幕式では、多くの関係者が参加された。北京中央美術学院版画家夫妻、中国美術館副館長、炎黄芸術館館長、安徽财经大学美術学院院長を始め友人や知人が祝辞を述べられた。“わんりい”の元代表・田井光枝氏も乞われて挨拶されたが、前日に急に頼まれて、長年使っていない中国語でのスピーチは荷が重いとの事で同行の‘わんりい’会員の高橋節子氏が通訳された。

展示作品の内、私は陝西省の黄土高原に住む農民たちの生活を撮った写真に興味を覚えた。私が彼と共に訪れた10数年前の黄河沿いに住む人々の生活が、今もほとんど変わらずに営まれていて、中国の大きな発展の陰で取り残されてしまったような印象を受けた。版画も全体的に陰影に富んだものが多く、心惹かれる作品ばかりであった。またこの黄土高原を訪れてみたいものである。周路氏は来年5月には日本に来るかも知れないとのことで、また再会できるならば嬉しい限りである。

今回一緒に参加された杉野氏に知り合いの李涛氏(中国国際図書貿易集团有限公司)を紹介くださった。私が潘家園旧貨市場へ行きたいと希望を述べると、杉野氏と共に案内してくださった。これまで何度か行っ



ホテルで再会を喜ぶ(左から二人目が周路氏)



潘家園旧貨市場にて



たことはあるが、土・日曜日は青空市場があるということで、正にこの日(4日)は土曜日のため、この市場を見て回ることが出来た。青空市場では主に書籍や古写真が売られていて、欲しいと思っていた書籍を2冊と数枚の写真を購入できた。写真は戦前のものばかりで、値段はかなりした。この種のもがたくさん売られていて、本当はもっと欲しかったが、今回はこれくらいにして、また次回に再度訪れることが出来ればと思った。

夜は李涛氏と彼の家族、杉野氏と共に夕食を共にした。奥さんと子供さんが来られて、楽しい一夜を過ごした。奥さんは日本に一度来たことがあるそうで、英語も話すことが出来る。息子は小学生だが、英語がかなり分かるようで、色々話をする事が出来た。

北京ではもう一つの目的があった。それは前編でも述べたが、古い教会を見て回ることであった。北京には19世紀後半に建てられたカトリック教会がいく



中国風の南堂(天主教聖母会)の入口



南堂の正面

つもあり、今回、南堂(天守教聖母会)、東堂(王府井教会)、聖三額爾天主堂、中華聖公会教堂(プロテスタント)を見学した。南堂は北京最古の教会と言われ、1605年にイタリア人マテオ・リッチが建てた教会である。そのほかの教会も歴史のあるものばかりで、日曜日にこうした教会を訪ねると礼拝に訪れる人の数の多さには驚かされる。

最後に、前回タクシー乗車の際の料金のことを述べたが、北京滞在中に何人かの人に教えてもらったことがある。最近多くの方は路上でタクシーを捕まえず、スマートフォンを利用して呼び出し、指定の場所に来てもらうシステムがほとんどだそう

だ。道理で空車が走っているのにタクシーを捕まえるのが難しいのが分かった。ただ、来てもらった車はみなタクシーではなく、普通の乗用車であった。北京到着時に乗った車の料金に関しては、かなりぼられたような気がする。

## 日中文化交流誌『和華』を出版、孫秀蓮氏の素晴らしい活躍について 床呂英一



孫秀蓮氏

2017年9月24日、私が所属している「中国を知る会」主催の講演会で私の知人の中国人・孫秀蓮氏が『和華』で日中草の根交流をテーマにお話し下さいました。講演会は「わんりい」226号でも案内いたしましたのでご記憶の方もいらっしゃるかと存じます。講演は孫氏が中心になって編集・発行している日中文化交流誌『和華』の創刊の経緯やその後の活動の他、中国に関する情報の提供もあり、参加者の好評を博しました。

孫秀蓮氏は2013年に滋賀大学大学院に在学中に日中関係が尖閣諸島問題を契機に一挙に悪化したことを憂い、日中の草の根外交を目指したいと『和華』を創刊しました。費用はアルバイトで賄い、借金をし、編集も一人でなされたとのこと。この努力をマスコミが絶賛し、その後、支援者も現れて、現在16

号まで発行し、12月発行の第16号は「漢方」特集です。『和華』は毎号、日本と中国の文化を紹介すると共にお互いの文化が相互に深くかかわっていることを伝えています。12月月発行の第16号は「漢方」特集です。また年に数回、「和華交流会」が開催され、これも好評です。

孫氏の話では日本での『和華』関連の活動の他に中国でも日中交流のために活躍されているようです。今後ますます活躍されることを祈ると共に、このような地道な日中の友好活動に心血を注いでいる中国の女性がおられることを日本の皆様に紹介したいとペンをとりました。



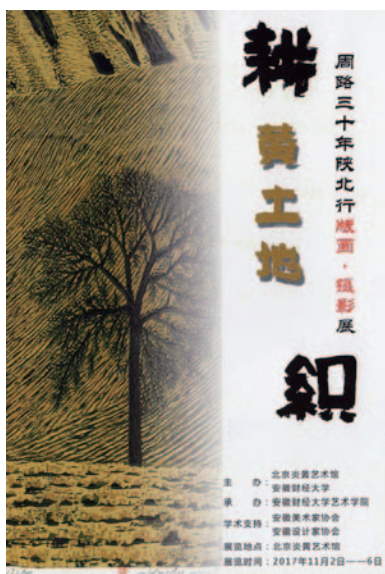
『和華』第14号

Facebook = <https://www.facebook.com/xiulian.sun>  
Twitter = <https://twitter.com/sunxiulian6891>

2017年11月2～5日、北京朝陽区にある「炎黄美術館」で、「わんりい会報」に有為楠氏が翻訳掲載中の「陝北黄土高原の花々」の著者・周路氏作品回顧展が開催されました。氏が30年に亘って陝西省陝北地方黄土高原地帯に通い、題材とした版画と写真の展覧会です。版画60点、写真60点を展示の展覧会は大きな反響を呼び、たくさんのネット新聞で紹介されました。その内の、中国中央電子台所属の周涛氏の記事を、我々と同行した高橋節子会員が翻訳しました。周路先生をより深く理解して頂けると共に、先生が愛してやまない陝北地方の剪紙に思いを巡らせていただければと思っております。(田井)

※原文のネット新聞には多数の作品が掲載されておりますが、紙面の関係で、「わんりい」HPに周路先生の作品の部屋を用意しますので、そちらをご覧ください。

中国の伝統文化は多岐にわたる。琴棋書画の四芸、詩、酒、花、茶など詳しく説明すれば枚挙にいとまがない。更にあげれば版画がある。版画も中国美術の重要な要素である。中国版画の起源も諸説紛々で、漢、東晋、六朝から隋までなどという説があるが、長い歴史の流れの中で長足の進歩を遂げた。王朝の交代を何度も経験し、明清時代には多くの文人、書籍商、彫り師の共同作業の下で、いろいろな流派や優秀な作品が現れ、中国版画はますます発展



「炎黄美術館」周路版画展チラシ

し繁栄するようになった。勇壮なものもあれば優雅で繊細なものもあり、趣は全く異なる。中で安徽省の版画は、その動向が中国全体に影響を及ぼすような重要なポストを占めた。

私は、版画といえば、ケーテ・コルヴィッツというドイツの版画家、彼女の名前が思い浮かぶ。最初は、西湖のほとりで行われた集会だった。集会に集った人々に造型、黒白灰色の対比を正確に理解させ、芸術家が労働者の社会に関心を持ち、被抑圧者の心に思いを寄せるために、朱修立先生が幾度となくコルヴィッツを例に挙げた。彼女の絵では強い怒りが造型になり、それが力強い芸術言語になって、彼女の偉大な精神を的確に表現している。

もしかしたら、その当時の魯迅はコルヴィッツの芸術に影響されていたのかもしれない。——「同情、愛、怒り、関心」は全て構図の中で一瞬にして吐き出

すことができるし、構図はその時々感情への共鳴から生まれている。「版画」は芸術家の「匕首」で、夜明け前の暗闇を鋭く切り開く——

中国の特殊な歴史の時期に、延安魯迅芸術学院は期せずして生まれた。これまでの魯迅芸術学院メンバーの中で一番の版画家であり版画史学家は周蕪である。前置きが長くなっただが、本文の主人公・周蕪の子を紹介する。周路先生である。ちょうど今、北京炎黄美術館で「耕織黄土地——周路三十年陝北行版画・

撮影展」を開催している。

周路先生を知ったのは四年前である。朱修立先生の紹介で「人文安徽訪談録」という番組のために、専門分野が違う芸術家と会見する約束をした。当時の周路先生は安徽省財形大学芸術学院教務の仕事で忙しく、更にスケッチをするために陝北を往復していた。そのためインタビューはずっと先延ばしになった。約束しては会えずの繰り返しで、次第にこの件はだんだんと忘れられてしまった。しかし、「陝北」この二文字の印象は深く、また好奇に満ちている。都市の大学教授がなぜ「陝北」を選んだのか。まさか、芸術家が「苦難」や「面白おかしい話」を探し求めている訳でもあるまいに。

時が移りちょうど過日、朱先生の家で周路先生と偶然出会った。周路先生は出版したばかりの姉妹編『耕織黄土地——周路三十年陝北撮影作品集』と『耕





版画制作に勤しむ周路先生

『織黄土地——周路三十年陝北行版画作品集』を携えていた。私はページをめくりながら、二人の先生のやり取りを聞いていた。周路先生を観察していると、朱先生が言った通りであった。周路先生は、絶えず手を動かし、唸々と話し、思いはいつも黄土高原にあり、気持ちは芸術にある。午前中の二人のやり取りから、周路先生について私はこう思った。——彼は自ら動いて陝北延川県に根を下ろし、往復すること三十年余、内心に流れているのは、父・周蕪先生の記憶であり、延安芸術精神のインスピレーションである。思いはいつも黄土高原にあり、三十年、一時も離れない。陝北の人々から「憨漢(実直な男)」と呼ばれるまで、外見から内心まで、「黄土高原の息子」になり、「息子」が果たすべき義務を遂行しているのである。つまり、黄土高原の精神を継承し発揚すること、黄土高原の文化を見守り残しておくこと、あとに続く研究のためにしっかりした基礎を作ることである。

### ●開幕式

中国美術館副館長・安遠遠はこの版画展開幕式で次のように述べた。

「周路先生は、家学、家教、信仰の外に、黄土高原に対して倦まずたゆまず追求している。作品には、素朴な真情が満ち溢れている。先生は黄土高原の人ではないが、黄土高原を異郷とせず自分の故郷にした。これは並大抵のことではない」

安館長の言葉は何のこだわりもなく飾り気がない。実際、中国のどこから来たのであれ、陝北に行ったことがある人は皆よく分かる。この土地に来ると、以前から知っているような親近感が生まれる。

なぜか周路先生が撮影した作品に郷愁の念を呼び覚まされる。なぜなら故郷への共感が深くしみ込んでいるからである。

「撮影とは、本来データが付帯した一種の副産物である。時間の堆積に伴って、撮影技術も高くなり、絵画的な見方も身につけた。撮影した画像は一枚の『絵』のようだ。作品集を作り、北京で撮影展を開催して、皆さんから認められた。そのことで私はさらに自信を深めた」

周路先生は撮影を専門にやっていたわけではないが、自然にうまくなっていった。撮影技術は進歩し、彼の芸術は移り変わる黄土高原文化の豊かさをありのままに見せる。時間は絶え間なく進む。我々は時間の速さを測る方法を持ち合わせていない。——本当の速度は見ることはできない——周路先生のカメラは時間を停止させ、動を静に変える。レンズの目を借りて、黄土高原に暮らす人の喜怒哀楽の一瞬を永遠にする。——黄土高原の純朴さと微笑。

若い頃読んだカルヴィーノの『月光が照らすイチヨウの絨毯』の結末にある話を思い出す。「空一面に舞うイチヨウ：実は、舞い散るイチヨウはいつとき毎、ひとひら毎、ほかの葉とは高さが違う。だから、もともと実体と実感のない空間が、人間の視覚には連続した平面として見える。一つの平面ごとにひとひらの葉がくるくる舞っている。しかもたった一枚だけで」

芸術家一人ひとは、一人でくるくる舞っている「イチヨウの葉」のようである。自分の芸術分野を黙々と耕すこれらの芸術家をつなげてはじめて、彼らの芸術実践と思考が彼らの時代を反映し、人類が歴史や文明を刻んでいることも証明する。

周路先生もそうした芸術家のひとりである。第二の眼を持っている。——カメラと彫刻刀。

延川県黄土高原の生活や文化遺産をまず保存し、後に続く者の研究に役立たせる。例えば剪紙(切り絵)。百年前、黄土高原の剪紙芸術はどのようであったか。剪紙芸術は一か所に止まらず流動交替している。無形文化遺産を伝承する人が次々といなくなり、技術は途絶える。民間芸術も原型の改変にならう。一回変わることは、一回枯れ落ちることである。

最終的に時空に消え去る。あたかもこの種の技芸は  
いまだかつて創造されなかったかのように。

今年5月、海南島三亜藍海リゾートの陳杰勇氏の  
招待で第23回三門峽黄河文化旅行フェスティバル  
及び第二回水上カーニバル打ち上げ式に参加した。  
黄河文化を体験すると同時に、函谷関や陝州地坑院  
等へ案内してもらった。さらに三門峽市委員会秘書  
長の特別な計らいで李先念同志が揮毫した「万里黄  
河第一坝」(万里黄河第一ダム)及び「中流砥柱<sup>1)</sup>」を  
参観した。ここではっと気が付いた。陝北は単に地  
理的概念だけではなく、重要なのは文化的概念なの  
だと。中華民族の象徴となる黄河、黄帝陵、万里の  
長城、黄土高原は、ここでは神秘的に一体となり、  
広大で、荒々しく、雄大である。とりわけ、地坑院  
へ向かう道で特別な衝撃を受けた。「人類はこのよ  
うに劣悪な環境で生存できる、まったく奇跡だ」と。  
そこに住む人民の温かさと純朴さを深く感じた。

陝北は貧しく立ち遅れた地域である。何世代も苦  
労して農作業をし、耕作にいそしんできた。粗放農  
業は陝北人に苦労に耐える人間としての品格、包容  
力のある人格を生み出した。陝北へ行ったことがな  
ければ、周路先生の人生経歴を適切に受け止めるこ  
とができなかったかもしれない。彼の撮影と版画を  
深く理解できなかったかもしれない。

**【問】あなたが関心の焦点を黄土高原に絞り、三十  
年間途切れることなく関心を向け続けてきたのは、  
どのような考えに依るものですか。**

周路先生は何か考えるところがあるようだ。真っ  
先に家族の影響をあげ、自分自身も黄土高原が格別  
に好きだと言った。

「沿海部の都市にはわずかしか行ってないが、中  
国のあらゆるところ、雲南、敦煌、シルクロード、そ  
の他の地区についてはかなり深く研究し、学んでき  
た。各地の文化は厚く豊かである。最終的にはやは  
り、私の性格は黄土高原のリズムに合っていた。力  
強く果てしなく広く素朴なところに、私は深く心を  
動かされた。黄土高原には人情味があり、さらに生  
活の真髄がある。人の一生は良いことをするには短  
い。私は自分の内なる声に導かれ、黄土高原を、そ  
して延川県を選んだ」

延安魯迅芸術院の起源から父親の影響に至るま  
で、すべてが彼を黄土高原の選択に導いた。

愛があれば、ただ真心を尽くす。それが幸せや喜  
びになる。もちろん周路先生が愛する黄土高原も、  
真心を彼に返してくれた。彼が1999年初めてと  
った賞は「魯迅版画賞」である。陝北延川文化局に出  
向中に創作した作品も賞をとった。この賞の獲得は  
まるで運命づけられているようではないか。延川県  
政府が授けた「延川県名誉市民」の称号、安徽省政  
府が授けた「特殊貢献手当専門家」の称号等々、数々  
の栄誉と成果を獲得した。周路先生はこれらの成功  
を「黄土高原恩恵」に帰結させた：延川県人民は彼  
を「憨漢」(実直な男)と呼ぶ。彼は陝北の農村に寄付  
をし、希望小学校建設を計画し、二人の子を大学に  
上げ卒業するまで援助した。黄土高原の老人や子ど  
ものために、干ばつで貧窮する黄土高原のために、  
声をあげてアピールした。彼が延川県を選ぶと同時  
に、延川県も彼を選んだのだ。

周路先生と黄土高原の物語を話題にしたとき、彼  
は陝北の谷あい、ヤオトンの人生、故郷の人、野良  
等々、かの地にまつわる多くのことを家宝のように  
数え挙げた。三十年余りの映像は黄土高原の「退耕  
還林<sup>2)</sup>」前後の移り変わりをありのままに映し出し  
ている。田舎に残された子供たち、村落の絶え間な  
い衰退、残された孤独な高齢者、青壮年労働者の流  
失、子どもたちさえ都会に出て進学する、荒廃する  
村落、文化遺産の酷い毀損。政府が力を入れて投資  
し、村を援助しようと旅行関連開発をするけれど、  
黄土高原のとてつもない変化の大きさにとっては、  
それらは結局のところ焼け石に水である。総体で  
は、大きな好転を望むのは難しい。いっそう幅広い  
社会参加を引き起こすと共に、政府の援助を喚起す  
る必要がある。

**【問】初心を忘れず、この「初心」とは何でしょうか。**

過去の人を思い、その歩んできた道を知る。心を  
込めて芸術の構想を練って初心を忘れず、自分の芸  
術に対する自信を打ち立てる。芸術に携わることは  
一般の仕事に比べ困難な選択である。とりわけ周路  
先生のような仕事は、才能があり根気があっても、  
志がなければ成功は難しい。誰もが「初心を忘れな



い」と言うが、スローガンだけに終わってしまう。周路先生は、深い文化的背景と哲学に根ざした「初心」をもって、陝北黄土高原で三十年余り携わってきた。

私がゆっくりとページをめくり周路先生の作品集を見終わると、朱修立先生は真心のこもった言葉で次のように述べた。

「我々の先人は、黄土高原で人と自然の関係が、天人合一、天人調和であると気づいた。先住民はこれを我々民族の立命哲学とした。人と自然は共存している。中国の総合的な国力が止まることなく高まるにつれて、目指す道の自信、文化の自信が徐々に世界に深い影響を与えている。これは我々が西側世界と反対の道を選んだからである。その根本の原因は文化の違いである」

周路先生は、黄土高原の思考をすべての人の前に展開し、その思考を呼び覚ました。たやすくできることではない。彼の絵と撮影は時間をかけて丹念

に味わわなければならない。奥が深い芸術は、広くて厚い黄土高原の文化、純朴さが持つ魅力を追求する。読むこと・考えることは芸術を楽しみ、精神を豊かにする価値がある。朱先生は二つの「好」を使って周路先生の芸術を褒めたたえた。第一の「好」は取り組む精神。周路先生の父親は延安時代、魯迅芸術学院の学生だった。父親が彼に与えた延安の心を継承した。第二の「好」は、彼の撮影と作品のすべて。黄土高原の厚さ、包容力、純朴さ、豊かさを体現し、われわれ中国文化の基底を思い起こさせてくれた。我々も周先生の芸術を前にその心を継承していかなければならない。

初心を忘れず、前に進む。

#### ■注

- 1) 中流砥柱：河南省三門峡市の黄河中にある柱のような山の名前。
- 2) 退耕還林：条件の悪い農地の耕作をやめ植林を実施する政策。2003年から黄土高原で全面实施。

#### ◆わんりいの講座

### 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

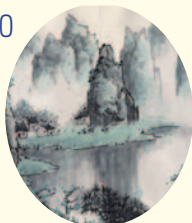
▲まちだ中央公民館 10：00～11：30

1月28日(日) 第3・第4学習室

2月12日(月・祝) 第3・第4学習室

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、  
現桜美林大学孔子学院講師)



▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

#### ◆わんりいの催し

### ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

●1月23日(火)10：00～11：30

●2月6日(火)10：00～11：30

共にまちだ中央公民館 視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail:wani@jcom.home.ne.jp(わんりい)



‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願ひします。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があります。お問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195(寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

#### 【1・2月定例会開催日及び3月号‘わんりい’発送予定日】

◆問合せ：☎044-986-4195(わんりい)

●定例会：1月19日(火)/2月9日(金)13：30～  
三輪センター・第三会議室

●2018年3月号‘わんりい’発送日：3月上旬予定(上記電話お問合せを) ※おたより発送日は弁当持参です

## 第2章 高鳳蓮初期の剪紙-3

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

筆者がかつて《陝北四女性の剪紙》を上梓した時、高鳳蓮の剪紙の外形上の特色を次のように描写したことがあります。「高鳳蓮の剪紙は、評判通りに風格があり、独特で一派を成して、伝統的な題材は同じですがその手法は普通の剪紙と全く異なっています。彼女の剪紙はすべて四角形で、密なところと粗なところが散らばってバランスが取れ、お互いに引き立て合っているところが、他の人達の作品とは違って新鮮です。鉛筆で下絵を描かず細部も鋏を使い、風の流れ、鶴の羽、獅子のたてがみまで全て思いのままに鋏で剪るところは、まるで魔法の鋏がひとりで動いているように見えて、思わず見とれてしまいます。そして、高鳳蓮が剪り出す動物・家畜、更には人物もまるで人類の祖先である猿のような表情で、悟空が西王母の桃を食べているような幸せそうな表情をしています。

作品の多くは下図のように折り返されて対称に剪られることが多く華やかで、石に彫られた壁画や、神話に出て来る神や怪獣のようにどっしりとして、不思議な雰囲気を持っています。」

“飛天”のイメージはご存知のように、敦煌壁画の経典の中から出ています。仏教の中では、極楽浄土で暮らす神聖な人物を“天”と呼び、飛天は多く墳墓室の壁画に描かれ、墓室の主人の魂が仙人となって天に昇るように、との祈りのシンボルとなっています。初めは壁画に描かれる、飛んでいる神の像を飛天と称していましたが、後に、敦煌壁画芸術の技法を表す専門用語となりました(右上図下)。

しかし、黄土高原の奥深くに住み、壁画を見たこ



剪紙を楽しむ。毎日の生活の中でかけがえのない一時



敦煌莫高窟の壁画“飛天” (百度百科から)

とも無い農村の老人が、どうしてこのような知識を得ることが出来るのでしょうか？ 或いは、虎の話と同じように、古老からの伝説として、聞いて、心で創造するのでしょうか？

高鳳蓮の剪り出す“飛天”は、敦煌壁画の“飛天”と、姿は違いますが同じような雰囲気を感じさせ、著者に、安塞地区の剪紙“農耕図”が、二千年以上前の漢代に鑄造された青銅器上に描かれた“農耕図”と酷似しているという事実を思い起こさせます。同



鳳凰



勇者



桃を食べる猿





飛天 3種



愛の告白

じ黄土高原で、同じ現代に、飛天にしる農耕図にしる、元の絵を見たことも知ることもなかった人達が、何千年も前に描かれた絵と同じような雰囲気剪紙を剪るのは不思議です。謎のタイムトンネルでもあるのでしょうか？

ところで高鳳蓮の剪紙の作品の中には、この他に“牽牛織女”の神話のような愛情伝説をイメージさせる剪紙もあるので(上図右端「愛の告白」)。

「抓髻娃娃」は、陝北地域で民間に流布している万能の精霊であり、人々の信仰と希望を叶える厄除けの神です。中国語で「抓髻」は髪を束ねる、「娃娃」は子供という意味ですから、日本語に訳せば「髪を結んだ子ども」と言ったような意味ですが、あまりピンときませんね。此处は、<sup>zhuā jì wá wa</sup>抓髻娃娃(ジュアジーワーワー)をそのまま、お話を勧めましょう。「抓髻」の「抓」は束ねる、つかむ、「髻」は髻(まげ)と言う意味で、「吉」と同じ音なので、「抓髻」は「吉を掴む」即ち「幸せを掴む」と言う意味になり、吉祥とされています。

延川地域では、古くからこの「抓髻娃娃」が土地の守護神とみなされ、人々は厄除け招福、更には子孫繁栄にまで、そのご利益を信じています。また、魚・蓮・石榴・鳥なども、多子・多福のシンボルと見做します。新婚の部屋には、このような図案がオンドル・壁・家具などの周り、至る所に見られます。男女が愛し合い、愛情が末永く続くことを表す絵、男性が耕し、女性が機を織る絵、植付け・収穫など農家の楽しみを表した絵などが、幸福のサンプルのように翻ります。見慣れないと驚きますが、よく見る

と、人々の生命力へのこだわりやよりよい生活への希望が見て取れます。

研究者によると、このような様式は、商(殷)の時代からの文化ですが、他の地域ではとうの昔に失われてしまいました。頭の上の二つの髻を庭の鶏に変えた図は、故宮博物院に収蔵される「青女玉佩」とそっくりで、昔からの生殖崇拝のなごりです。

高鳳蓮の剪紙「抓髻娃娃」は、陝北民間剪紙の中でも代表的な作品で、「娃娃」が様々なお目出度いもの—鶏・兔・石榴・牡丹など—を手にして、子供や孫の誕生を待ち望む気持ちがいじみ出て来ます。「娃娃」には、性別があり、女の子は頭に花の冠や花飾りをつけており、男の子はまるい頭に辮髪を垂らしていますが、違いははっきりせず、どちらも楽し気に紙面から飛び出してくるような勢いがあります。

ここに、“蓮の上で鶏を掴む娃娃”と言う一連の剪紙があります。鶏は中国語で ji (ジー) と発音し、髻と同じ音なので、字を髻から鶏に変えただけで、この意味になります。陝北の結婚式で初夜の前に歌われる「棗の歌」の内容を示し、「蓮の花を足で踏みつけ、鶏を掴めば、春が過ぎてきっと喜びがやって



抓髻娃娃 1



抓髻娃娃 2



扣碗 -1

来る」と言う歌詞に添った剪紙で、結婚式の後の一刻も早い懐妊を望むものです。

高鳳蓮は言います。「何かを思いついたら剪り、何かが目浮かべば剪ります。紙に向かうと心が自由になって、何でも剪りたいものを剪ります」。そんな彼女の剪紙のシリーズに「扣碗」と言うのがあります。中華料理で「扣碗」と言う蓋付容器で蒸し物を供するものがありますが、剪紙の「扣碗」は、蓋と身がきっちり揃

っているものではなく、紙面上の碗状のものの中からは、様々なものが飛び出てきます。獲れたてのぴちぴちとはね回る魚であったり、飛んで行ってしまいそうなスズメであったりします。虎が四肢をばたつかせている図もあり、彼女によれば「これは“飛び虎”です。天上界からやって来ました」とのことです。

陝北では生活用品である「扣碗」がシンボリックな意味を持ち、その剪紙作品は、花嫁が婚礼行列の折に持参する蒸しパン（饅頭＝マントウ）の上に貼りつけられたりします。

また、「扣碗」には、生殖崇拜の巫術文化と関係する別の意味があります。扣碗の上の部分は天を、下の部分は地を表し、扣碗は、天地が合わさって宇宙となり、天地融合、陰陽和合、万物繁栄を表すシ

ンボルでもあるので「扣碗」の剪紙は多く新婚夫婦の部屋に飾られます（図 扣碗-1・2）。

黄土高原に住む人びとは、生活には苦勞が多いけれど、豪気で楽観的な気性と純朴で勤勉な性質を持っています。彼らは剪紙に、運命に対する抵抗を託し、生活に対する素朴な祈りと諦めの感情をにじませるのです。歳月を重ねるうちに、高鳳蓮は、古くからこの延川地区に伝わっている民族風習に対する理解が深まりました。特に、専門家に見出されて、専門の技術指導を受けてから、高鳳蓮の剪紙技術は更に新しい高みへと昇りました。



扣碗 -2

剪紙の中で、人物の身体には、牡丹、蓮に戯れる魚、蓮を噛む魚などの装飾、馬や虎の身体には隠喩を込めた装飾が加わり、彼女の手にかかると、伝統的な文明観と現代生活の融合が、いとも容易く大胆になされて、一つのジャンルが生まれるのです。

人物を剪れば、手足が今にも躍り出しそうに生き生きとして、男女の語らい、仕事をする男女などどれをとっても、この地に暮らす人々の生活が

優しく表現されているのです。彼女は、住民の気持ちや風習を深く理解し、延川地域に古くから伝わる生存の意識や生活感情を作品に反映させているのです。これこそが、高鳳蓮の芸術の真髄です。

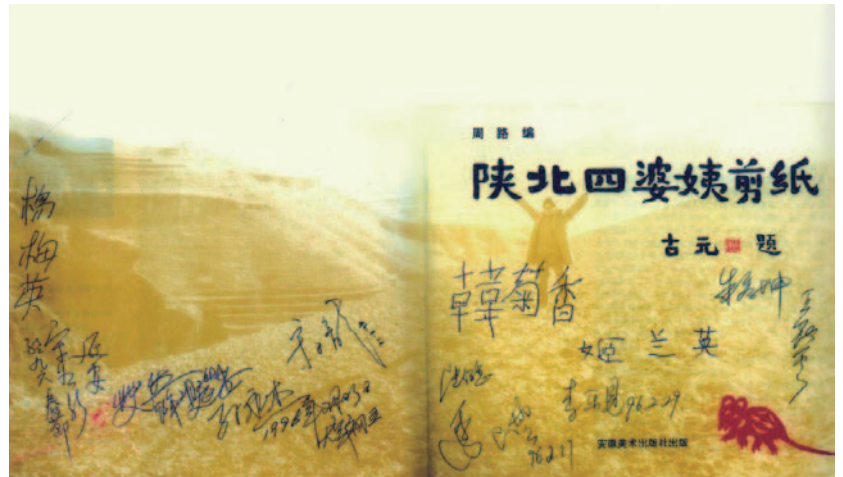
皆さんは、高鳳蓮の剪紙をご覧になって、どのような感じを受けますか？ 興奮したり、新鮮さ、奇妙さを強く感じたり、素晴らしさを感じたりするでしょうか。いずれにしても、何か後を引く味わいが残りませんか？ それは、彼女の作品は陝北地域に積み重ねられた豊かな伝統文化を体現しているからなのです。

1995年、安徽美術出版社から、古元氏の題字を頂いて、私が編纂した「陝北四婆姨剪紙（陝北四女性の剪紙）」は、書中に延安の姫蘭英、洛川の楊梅英、韓菊香、延川の高鳳蓮の作品が収められています。





「陕北四婆姨剪纸」表紙



寄せ書きの「陕北四婆姨剪纸」見返しページ。右下に高鳳蓮の剪紙が貼付

当時、高鳳蓮は未だ、安塞地域の女性たちほど知られてはいなかったのですが、この画集で初めて人々の注目を集めました。当時の印刷条件は、亜鉛版の単色刷りで、画像もあまり良くありませんでしたが、それでも高鳳蓮の剪紙が、明らかに抜きん出た風格を見せているのでした。

この画集の原稿は、1992年に完成し、出版社に渡したのち、私は日本へ留学するので国を留守にしました。その為、この本の出版が沙汰止みになり、1994年に私が帰国してから再度出版に向けて働きかけたのですが、暫く時間が経っているので赤字を恐れた出版社は出版をためらいました。私自身が費用の一部を負担することで出版社を説得し、ようやくのことで出版にこぎつけました。1996年旧暦正月、出版後間もない「陕北四婆姨剪纸(陕北四女性の剪紙)」を携えて、私は、四人の女性を尋ねました。交通の便の関係から、先ず洛川の楊梅英、韓菊香、次に延安の姫蘭英を訪れて、この本を贈呈すると共に、本の見開きページに夫々に、記念の署名をするよう頼みました。

陕北地方の人たち、特に高鳳蓮世代の女性は、学校へは行かず、字を知らない人がほとんどでした。洛川の楊梅英は何年か学校へ通ったそうで、署名をしてくれました。韓菊香は何日か私塾に通ったことがあると言って、繁体字で署名してくれました。姫蘭英は全く学校へ通ったことが無いので、字は知りませんでした。私の依頼に、娘さんが彼女の手を取って書かせてくれて、何とか名前を書いてくれま

した。

しかし、最後に訪れた延川の高鳳蓮の家では、本の出版をみんなが喜んでくれましたが、高鳳蓮に署名を頼むと、彼女は拒否しました。姫蘭英の場合を説明すると、周りの人々はそれに賛成して、娘さんが筆記用具を持って来て、一緒に書く準備をしてくれましたが、彼女はきっぱりと拒絶しました。あまりの激しさに、その場の雰囲気は気まずくなりかけました。

しかし、幸いなことにその後、高鳳蓮自身の提案で、小さな紙を取り出し、指の先程の小さな鼠を剪り、それを彼女の署名として本に貼ることで解決しました。高鳳蓮は鼠年で、この鼠の剪紙が、彼女の署名の代役を務めたのです。見開きページの右下隅にいるのがその鼠です。このように、署名一つにしても、高鳳蓮は、他の人々とは対処の仕方が違います。こんなところにも、彼女独特の個性がうかがえます(上図右)。

陕北の農村では、剪紙の腕前が女性の人格を表すと考えられ、頭が良く、手先の器用な女性は家人の敬愛を受け、隣人たちから尊敬されます。そして、この地に暮らす女性達の生活に対する期待や祈りが、剪紙となって続いて来たのです。

そのおかげで、我々は中華民族の文化の多様性を知り、生き続ける地域を見つけ出して、中華文明の遺伝子をまた一つデータベースに加えることが出来るのです。これこそが、何千年も綿々と続く中華文明の真髄なのです。(続く)

## 〈第11回市民協働フェスティバル「まちカフェ」2017年度〉

2017年12月3日(日) 10:00～16:00 場所:町田市役所全館

第11回市民協働フェスティバル「まちカフェ」が、今年も12月3日に町田市役所の1階から3階のフロ

アールを題材に参加者に懇切丁寧に指導されてい

アールに開催されました。これは、町田市内で活動するNPO法人、市民活動団体、町内会・自治会等の地域活動団体が一堂に集い、活動発表や手作りの商品、地場野菜の販売などを通じて交流を深めるイベントです。フェ



市役所1階の会場風景

スティバルは午前10時に石阪市長の開会宣言でスタートしました。まだ11回目と歴史は浅いわけですが、参加団体は日頃の成果を訪れる市民にアピールすべく一生懸命声を張り上げていました。

わんりいは、一昨年から参加しており、今年が3回目となります。これまで祭りの様子が充分わからないまま参加してきました。一昨年は手始めに中国茶や中国黒酢、ピータンの販売をしました。昨年は活動の趣旨



‘わんりい’ブースの看板

に添うものとすべく、「中国文化を楽しむ」をテーマに午前は中国の剪紙(ハサミを使って剪る切り絵)、午後は水墨画の体験教室で参加しました。剪紙は何さんのご指導よろしく予想以上の人気を集めました。午後は日中水墨画協会・会長の満柏さんが2017年の干支である酉・にわとりと、四君子と言われる、梅・蘭・竹・

これらの経験を踏まえ、今年はラオスの少数民族であるモン族の刺繍小物の販売と昨年の満さんによる水墨画教室を午前・午後とも開きました。刺繍小物は11月3日の夢広場でも好評を博しました

が今回も多くの方に購入していただき、モン族の支援につなげることが出来ました。水墨画教室は来年の干支である「戌(犬)」が題材にされました。満さんの「まず目を二つ描いて、それから口と鼻をこのようにその下に加えて…そうそう…」のように言われる通りに描いていくと、次第に犬の顔が出来上がります。皆画家の気分です。昨年よりさらに子供たちの参加が多く、目を輝かせ、一時は順番待ちができるほどでした。書かれたほとんどの方が自分の

作品に満足され、全員半紙に描いた作品を大事そうに持って帰られました。

中国文化を身近に体験することは日頃はあまりないだけに、参加者にとってはいい体験だったと思いますし、その喜ぶ笑顔を見るとわれわれ準備委員は一日の疲れが吹き飛ばすようでした。

(報告:寺西俊英)



満柏さん(左端)の指導で水墨画教室



元気いっぱいの子もたちの作品



東京中国文化センター・新春の展覧会 2 題

入場無料

1 中日平和友好条約締結40周年記念  
第2回「美しい中国・美しい日本」写真展

日中写真交流協会会員約35名と日本人写真家10名の作品を展示します。中国人と日本人それぞれ独特の視線で、また作者それぞれの感性で日常生活の瞬間や風景を切り取り、「美しい中国、美しい日本」を表現する。

- 2018年1月10日(水)～1月19日(金)
- 開幕に向けてのトークショー  
1月10日(水) 14:00～14:40(要申込み)  
◆ 演題「言葉を超えて心が通う瞬間」  
講師：安珠(日本人写真家)
- 開幕式：1月10日(水) 15:00～(要申込み)
- 主催：日中写真交流協会／中国文化センター

2 歡樂春節 中国剪紙文化展  
～剪紙で見る春節の楽しさ

春節は一年で一番大きな中国のイベントです。多くの人が力を入れて年越しのための飾りつけをします。その飾りの中で「剪紙」は絶対に欠かせません。

- 2018年1月24日(水)～2月2日(金)
- 開幕に向けての講演会  
1月24日(水) 14:00～15:20(要申込み)  
◆ 演題「吉祥文化・剪紙に込められた意味」  
講師：王超鷹(文化研究者・剪紙伝統工芸師)
- 開幕式：1月24日(水) 15:20～(要申込み)
- 剪紙教室：1月25日(木) 15:00～17:00  
(要事前申し込み/手ぶら可)
- 主催：中国文化センター、PAOS GROUP、上海天台山民俗博物館

■ 開催会場 中国文化センター 港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F  
日比谷線「神谷町」駅4a番出口より徒歩5分 銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩7分  
開場時間 10:30～17:30(初日14:00/最終日13:00迄) 土日祝休館  
▲ 上記イベントに参加を希望される方は、下記サイトよりお申し込みください  
中国文化センターホームページ・イベント一覧ページ <https://www.ccctok.com/event>

2月の催し予告

全て参加無料

- ▲ 詳細は、「わんりい」HPなどでご覧ください
- ① 江西儺面儺舞展 <https://www.ccctok.com/event/event-detail/?id=6783>  
2018年2月6日(火)～3月2日(金)(土日祭休館)  
中国文化センター 10:30～17:30
  - ② 中国戯曲シリーズ講座  
【第1回】2018年2月13日(火)、【第2回】3月14日(水)  
【第3回】4月10日(火)  
会場：中国文化センター
  - ③ 小松健一・烏里烏沙作品展  
「彝人(いじん)～中国大陸の山岳民族」  
2018年2月21日(水)～3月5日(月)(火曜休館)  
リコーイメージングスクエア 新宿=10:30～18:30  
■ ギャラリートーク=2/24(土)、2/25(日)、3/3(土)、  
3/4(日) 15:00～16:00

第5回 桜美林大学孔子学院 漢詩朗読・創作発表会

【主催】桜美林大学孔子学院 参加無料

- 会場：桜美林大学淵野辺キャンパス 2F 202教室  
2018年1月27日(土) 13:00～17:30
- 漢詩講演会 13:00～14:00  
「漢詩の愉しみ」  
講演者：石川忠久(斯文会理事長、全国漢文教育学会会長)  
古典中国文学者 漢詩の著書・編著多数
  - 朗読・創作発表大会 14:15～17:00  
～最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞などの表彰あり～  
<http://www.obirin.ac.jp/kongzi/news/koushi/2017/20180127.html>  
発表申込：2018年1月24日(水)まで  
詳細問合せ：E-mail: [kongzi@obirin.ac.jp](mailto:kongzi@obirin.ac.jp)
- ☎ 042-704-7020(桜美林大学孔子学院事務局)  
※終了後、懇親会有り(希望者 会費：3000円)

恒例! 'わんりい' 新年会日取り決定!!

2018 'わんりい' 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう

場所：麻生市民館・料理室

(小田急線・新百合ヶ丘駅下車北口3分麻生総合庁舎内)

2018年2月4日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール [wanni@jcom.home.ne.jp](mailto:wanni@jcom.home.ne.jp) TEL/FAX 042-734-5100(わんりい)



3月31日はミミにいちばん! **第12回 オーケストラの日** <http://www.orchestra.or.jp/orchestraday2018/>

子どもも大人も、「オーケストラの魅力」をみんなで楽しもう! 2018年3月31日 東京文化会館(上野公園内)

● **スペシャルイベント** 11:00開場 **入場無料**

東京文化会館各所で、オーケストラを知るいろいろな催しがあります。  
(‘わんりい’印刷版のスペシャルイベント記事は間違いでした。お詫びします)

● **コンサート** 14:00開演 場所: 東京文化会館・大ホール

【演奏】オーケストラの日祝祭管弦楽団(首都圏の全プロフェッショナル・オーケストラより集まる特別なオーケストラ)  
指揮: 藤岡幸夫、ヴァイオリン: イム・ジョン(2015年エリザベート王妃国際音楽コンクール優勝)

【曲目】チャイコフスキー: ヴァイオリン協奏曲/モーツァルト: 歌劇「フィガロの結婚」序曲/レスピーギ: 交響詩「ローマの松」

◆ チケット: S. 3,000円、ペア券(S席2枚) 5,000円、A. 2,000円、B. 1,000円、S. ジュニア券 1,000円

<http://eplus.jp/sys/TIU14P002178818P0050001>

◆ 問合せ&チケット申込み: 日本オーケストラ連盟 ☎03-5610-7275(平日10:00~18:00)

※スペシャルイベントの詳細他は、キーワード「日本オーケストラ連盟」を開き、トップページにある「3月31日はミミにいちばん! オーケストラの日」を開いてご覧ください。

**会員募集! 【中国語入門サークル】**

和気藹々と中国語を勉強しているサークルです。楽しみながら中国語を始めませんか。見学ご希望の方は気軽にお問合せください。

- 会場: 町田中央公民館(原則として)
- 日時: 第1・第2・第4土曜日  
10:00~12:00
- 会費: 4,000円/月
- 講師: 郁唯(天津師範大学卒)
- ◆ 問合せ: ☎042-725-3963(森川)  
E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp



**初心者のための体験のお誘い**  
**【鶴川水墨画教室】**

- 講師: 満柏(日中水墨協会・会長)
- 場所: 鶴川市民センター 小田急線鶴川駅からバス  
「鶴川市民センター入口」下車  
(町田市大蔵町1981 駐車場有)
- 曜日・時間: 14:00~16:00  
毎月第2、第4(月)
- 体験参加費: 1000円  
(見学無料/手ぶらで参加可)
- 問合せ: 野島 ☎042-735-6135



継続25年 **【わんりい中国語勉強会】(中級)**

‘わんりい’活動の母体として始まった中級程度の勉強会です。楽しく中国語を学んで25年になります。テキストによる学習のほかに中国語でのフリートーク、作文、聞き取りなどもやっています。見学は連続4回まで無料です。

- 場所: 鶴川市民センター(町田市大蔵町1981-4駐車場有)
- 日時: 毎週火曜日(月4回) 19:00~21:00
- 会費: 月額5,000円(授業料・会場費など)
- 講師: 郁唯(天津師範大学卒)
- ◆ テキスト: 「风光汉语・中級口语II」(北京大学出版)
- ◆ 問い合わせ: ☎042-735-2717 三澤  
E-mail: fwjg1705@mb.infoweb.ne.jp

※「漢詩の会」「Emme ボイス・トレ」の講座、‘わんりい’定例会・おたより発送日の案内は19ページに掲載してあります。皆様のご参加をお待ちしています。

※毎年2月は‘わんりい’の発行はありません。次号、3月号でお会いしましょう。

**‘わんりい’ 230号の主な目次**

「寺子屋・四字成語」大器晩成(9) .....	2
論語断片(33)吾が好む所に従わん .....	3
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(20) .....	4
東西文明の比較(21) .....	6
「漢詩の会」⑦李白、阿倍仲麻呂との別れを惜しむ・他 .....	8
「漢詩の会」⑧魯迅の若き思い・他 .....	10
樹木・花にまつわる物語(1)ウメ 梅 .....	11
海外出張の思い出・旧ソ連(1) .....	13
4年ぶりの北京 .....	14
中国人女性、孫秀蓮氏のこと .....	15
「陝北三十年“耕織”黄大地」 .....	16
黄土高原に咲く目にも彩なる花々 V .....	20
活動報告【第11回市民協働フェスティバル・まちカフェ】 .....	24
‘わんりい’掲示板 .....	25・26